

## 複製の未来— Ishiguro の *Never Let Me Go* 分析

中 村 晴 香

### 1. はじめに

Kathy の語りによって伝えられるクローンの子どもたちの生活、主に Hailsham という寄宿学校のような特別な施設での生活を見ていくうちに、読者はクローンであり人間とは異なった存在であるはずの彼らの世界に誘いこまれ、共感していくこととなる。もちろんキャシーの語りによってのみ伝えられる出来事を素直に信頼すべきかどうかについては疑わしいところである。とりわけ、イシグロ作品においては、一人称の語りが特徴であり、かねてから彼の作風における「信頼できない語り手 (unreliable narrator)」は取沙汰されており、彼の代表作でもある *The Remains of the Day* (1989) の主人公である Stevens はその代表格といえる。

Kazuo Ishiguro (1954-) の他作品同様、*Never Let Me Go* (2005) においても、彼の描き出す登場人物による一人称の語りの為に、この作品の語り手は「信頼できない語り手」と称されることがある。Mark Currie は、そう主張する批評家の一人である。イシグロ自身はこの作品において、柴田元幸との対談 (柴田 43) の中で「信用できない語り手」をやめたと言い、キャシーについて、基本的にはストレートな語り手であると述べている。確かにカーリーが述べたように、キャシーの語りには「ずいぶん昔のことで、多少は記憶違いもあるかもしれませんが」(13)「いま振り返ると」(36) など曖昧な部分が多く挙げられるが、キャシー自身、自分の記憶の不確かさを認め、過去の記憶を思い出せない自分をしっかりと認識しているという事からも単に、彼女

の語りを「信用できない」と言い切る事はできないだろう。平井杏子<sup>1</sup> が述べているように、この作品において、キャシーの語る多少曖昧な過去の記憶は、明確に述べられていないということによって解釈の幅を持たされており、そこへ読者が自らの過去を放り込むことが出来るような「隙間」を作りだしている。この物語についてイシグロは「どんな読者にも自身の人生の反響を見出せるような作品にしたい」(“Future Imperfect”)と語っている。そうであるとするれば、キャシーの語りを単に「信頼できない語り手」としてしまうのは、この物語におけるひとつの特徴をつぶしてしまうことになりかねない。なぜならこのような「隙間」を作りだすキャシーの曖昧な語りこそが、より多くの読者に共感を抱かせ、彼女の語る過去と読者自身の過去とを重ね合わせることを容易にしているからである。

本稿では、『わたしを離さないで』の主人公であるキャシーの語り、読者を巻き込んでいく形で展開していくことにより、読者がキャシーの語る記憶を強制的に共有させられていくということ、又その一方で、絶えずその語りの中に違和感を与えられているということによって、読者自身の人生についての再考を促し、通常語られる人間とクローンという優劣関係をも揺るがしながら、複製品の価値を再評価しているということについて、考察していくことにしたい。

## 2. 共有される記憶

キャシーの語りの特徴のひとつとして挙げられるのが、彼女が読者を自分と同じ世界に引き入れていくということである。例えば、ヘルシヤムでの出来事について話をする際、キャシーはたびたび、「ほかではどうか知りませんが、ヘルシヤムでは…」(13)といった具合に話し始める。キャシーの語る“you”という呼びかけは、読者に自身の過去を強制的に振り返らせることになり、読者にあたかも似たような経験があったかのように錯覚させることになる。つまり、キャシーは読者を物語の登場人物であるかのように扱

い、招き入れるのだ。そんなキャシーに対して読者は、彼女がクローンであるということ意識することなく、懐かしい思い出話を語り合うことのできる旧友であるかのような感覚を抱き、知らず知らずのうちにキャシーを身近な存在として捉えることになっていく。それはこの物語の冒頭にあるキャシーの自己紹介からもみることができる。

My name is Kathy H. I'm thirty-one years old, and I've been a carer now for over eleven years. That sounds long enough, I know, but actually they want me to go on for another eight months, until the end of this year. That'll make it almost exactly twelve years. (3)

このように、物語の初めにキャシーが、あたかも普通の生活を送っている女性として紹介されることによって、読者は彼女がクローンであると意識することなく、自分と同じような存在として、退職間近のごく普通の働く女性として、キャシーの事をすんなりと受け入れることが出来る様な地均しをされているのである。

更に注目したいのは、キャシーが、単に自分で思い出を整理するためだけに語っているのではなく、他人に向けても語っているという点である。キャシーは、ヘルシヤムの思い出を繰り返し聞いたがった患者について、ヘルシヤムの事を自分の子供時代の記憶として思い出したかったのだと言い、更に、キャシーの記憶とこの患者の記憶が交じり合う可能性についても述べている(5)。このキャシーの言及は、彼女の記憶が共感すべき素晴らしいものであるという印象を与え、彼女の持つ記憶を自分のものとして「思い出したい」と、読者をより一層惹きつけるのである。この患者がキャシーの記憶に拠り所を求め、その思い出を共有したように、読者もまた、キャシーの語る思い出に無意識に自身の過去を重ね合わせ、彼女の記憶を共有していくことになるのだ。

記憶の共有を更に助長させているのは、子どもたちの生活の基盤となって

いたヘルシヤムでの教育システムである。ヘルシヤムにおいて先生のような役割を果たしている“guardians”と呼ばれる保護官たちは彼らに普通の授業を行う傍ら、彼らがクローンであり人間に臓器を「提供 (donation)」する為に作りだされたという事実を少しずつ教えていく。Cynthia F. Wong が「保護官は子供たちに定められた運命の恐ろしさを知ることから彼らを守っていた」(Cynthia 86) と指摘するように、その伝達方法は、子供たちに学んだ知識を本当に理解するまでの時間を作り出し、実際に理解できるような年齢に達したとき、違和感なくその事実を受け入れることができるようにと行われたものであった。その結果、キャシーは「提供」についての自身の知識に関して、以下のように述べている。

Certainly, it feels like I always knew about donations in some vague way, even as early as six or seven. And it's curious, when we were older and the guardians were giving us those talks, nothing came as a complete surprise. It was like we'd heard everything somewhere before. (81)

このキャシーの発言は保護官の一人であり、ヘルシヤムの教育方法に疑問を抱いていた Miss Lucy の “you've been told and not told” (79) という発言を受けてキャシーが語ったものである。ここでルーシー先生の指摘する「教わっているようで教わっていない」ものというのは彼らに近い将来課される事となる「提供」についての事である。ヘルシヤムの中では「提供」にまつわることは「暗黙の了解 (unspoken rule)」とされ自由に語ることはできなかった。その為、キャシーの語りによる過去の回想の中でも「提供」に関することは曖昧にぼかされている。この「暗黙の了解」というルールの為に起こる説明不足から読者はそこに謎があるのではないかとキャシーの語りに次第に引き込まれていくのである。更に、キャシーの語るたわいない思い出話の中に見え隠れする普通の子どもの違いから、違和感を感じ取り、彼らがクローンであるという答えに辿りつくまで読者は、なぜ解きに参加させられる

事になる。この方法はヘールシャムで子どもたちが自分たちに関する情報を断片的に、徐々に与えられていたのと同じ方法であり、この物語を読み進める読者も又、無意識のうちにキャシーたちヘールシャムの生徒が自分たちの事を学んでいったように、彼らの事を学んでいくこととなる。つまりそれは、彼らがクローンであり、普通の子どもとは違うという事実に対する読者の衝撃や抵抗感を和らげ、読者にとって彼らをより受け入れやすい存在へと変化させていくのだ。その結果読者は物語を読み進めるにつれて、彼らの人生を追体験することとなり、彼らがどのように自身の運命と寄り添ってきたかをありありと感じさせられるのである。そしてヘールシャムに憧れた患者同様、キャシーの人生を自身の記憶として思い出すことになるのだ。

以上のように、キャシーの語り、ヘールシャムの教育システムが、読み手を招き入れ、巻き込みながら進行していくことで、読者は「もうひとつの現実を作りたかった」（柴田 42）と語るイシグロの言葉どおり、きわめて精妙に描き出される別世界の記憶を共有させられていくことになる。しかし、その世界には、「提供」という未来を制限する措置がなされており、キャシーの語る記憶に既に入り込んでしまっていた読者に、読者と彼らとの違いを突きつけることになる。

### 3. 違和感の所在

キャシーや彼らの存在を身近に感じ、記憶を共有する一方で、絶えずその関係を隔てている違和感に読者は気付かされる。その違和感がどこから来るものであり、どのようなものか、又、その違和感は読者に対してどのような反応を引き起こすのかについても探っていきいたい。

ヘールシャムで過ごす子どもたちの生活習慣や態度などから、時折、彼らがやはりクローンであるという、「普通の人間」との違いを意識させられる出来事がある。具体的には、毎週行われる健康診断、怪我に対する子どもたちの敏感な反応などが例として挙げられる。特にトミーの肘の怪我を発端

に子どもたちの間ではやった「ファスナーでの開閉 (unzipping)」(86) という冗談は提供者ならではといった特異なものである。そんな特異性の中で、とりわけ目を引くのが、ヘールシャムの中で公然と語られる性に関する話題である。「暗黙の了解」というルールの中であるからこそ、語られすぎる話題に読者は違和感を覚えるのだ。とりわけ、通常であれば隠され、公然とは語られない性に関する話題が、逆にヘールシャムではオープンに語られているというのは、ヘールシャムという遊離した世界を一層際立たせている。それでは、なぜ「性」に関する話題は語られ、「提供」に関する事は語られないのかということ、キャシーの語りから考察していきたい。

キャシーは、ヘールシャム時代に「セックスが強迫観念になっていたのかもしれない、まだ経験していない人は、ぜひ。それも、お早めに、という雰囲気でした。」(151)と述べ、その他にも、初体験を済まそうとする準備や心構えについて、本や映画からどのように性行為を学べるかなど、熱心な自身の態度を細かく語っており、コテージに移ってから、自らの性衝動や一夜限りの関係をもった先輩などについて、ルースとの会話を通じて語っている。このように性に関する話題がキャシーの関心事であったのは明らかである。又、キャシーが性について饒舌であったように、ヘールシャムの他の生徒たちもその話題についてオープンに語っていたのは「わたしたちは性にかかわる問題をいつまでも議論して飽きることはありませんでした」(149)と語られていることからわかる。普通の思春期の子どもたちが性に関する話題に敏感であるように、ヘールシャムの子どもたちにとっても興味を引く話題であったというだけであれば、この事実はより読者の共感を得たろう。しかし、主任保護官である Miss Emily の言葉がそんな読者の考えを改めさせることになる。

Out there people were even fighting and killing each other over who had sex with whom. And the reason it meant so much-so much more than, say,

dancing or table-tennis-was because the people out there were different from us students: they could have babies from sex. That was why it was so important to them, this question of who did it with whom. And even though, as we knew, it was completely impossible for any of us to have babies... (82)

本来、性行為の結果再生産されるはずの「子ども」という存在が完全に取り除かれているにも関わらず、一見、何の問題もないかのようにオープンに語られているということ、又、キャシーが語る、事実を知った生徒たちの不自然な反応 (79) は、読者に異様な感覚をもたらすことになる。なぜなら、生徒たちの関心が過度に性行為そのものに向いているからである。彼らは性行為に焦点を合わせることで「子どもができない」という事実を周縁に追いやり、「性行為」と「子ども」の繋がりを完全にかき消しているのである。性行為についてオープンに語ることで、彼らは無意識にも現実と直面することを避けているのだ。

つまり、ヘールシャムにおいてオープンに語ることは一種の自己防衛の手段であり、意識を逸らす方法である。しかし、その抑圧された思いはキャシーのお気に入りの曲、この小説のタイトルにもなっている、*Never Let Me Go* という歌の誤解に表れている。キャシーはこの曲について、母親と赤ちゃんの歌である (70) と考え、歌詞にでてくる“baby”を恋人ではなく、赤ちゃんの事だと解釈する。ウォンがこのキャシーの曲の誤解について、人間の性衝動と再生産の性質と働きについて増していくキャシーの懸念を明らかにしている (Wong 99) と指摘するように、この誤解はキャシー自身、赤ちゃんを産めないという現実に影響されているのは明らかである。

オープンに「語られる」という観点から、子どもたちの冗談についても言及したい。上記の例として挙げた、「ファスナーでの開閉 (unzipping)」の様に、彼らは自身の身体のパーツを「物」として扱い、それが実際に血の通った、自身の「一部」として捉えるのを避けている。身体のパーツをモノ化し、

取り外し可能なおもちゃのように扱うことで、「提供」に対するハードルを最大限に引き下げ、いかにも痛みを伴わない遊びの延長のようなものとして慣れ親しむことができるようにしているのだ。それは「語られる性」とはまた違った未来への漠然とした恐怖に対する、彼らなりの対処法であり、キャシーはこの冗談を「将来への心構えを作るための冗談」(86)と述べている。ヘルシャムにおいてオープンに「語ること」や「冗談」が近い未来に待つ彼らの果たすべき役目と直面するのを防ぐ自己防衛手段、あるいは対処法であるとすれば、「語られない」事柄は何であるのか。

ヘルシャムにおいてタブー視され語られないことといえば、「提供」に関すること、そして「ポッシブル (possible)」に関することである。「ポッシブル」とは自分たちの複製元であるかもしれない人を指す名称で、「親の可能性がある」(136) という意味で子どもたちの間でそう呼ばれていた。「提供」は直接的に彼らの終わりを意味し、「ポッシブル」は彼らが人間のクローンであるということをより強調する、と同時に、彼らの生まれてきた理由であるこれからの役割を示す。つまり、語られない「提供」と「ポッシブル」も又、彼ら自身の定められた「未来」を連想させるものであるという事がわかる。どちらも未来を想起させる言葉でありながら、一方は語られ、もう一方は語られない。その理由として考えられるのは、語られる「性行為」が「子ども」という未来につながる要素を完全に取り除いているからではないだろうか。未来を想起させるものをただ取り除くのではなく、あえて取り上げ、本来あるべき未来を一度提示した上で、その可能性をはっきりと否定する。こうすることで、クローンである彼らの限られた「未来」はより強調され、読者は彼らの短い人生を一層意識させられるのである。何も語らないというヘルシャムのルールが、現実とできるだけ直面しなくて済むように設けられていることによって、逆に読者はその事を意識せざるを得ない状況に追い込まれているのだ。さらに、時折、この違和感を読者に印象づけることによって、読者を彼らの小説世界から読者の現実世界へと引き戻すこととな

る。その結果、読者は、キャシーの語りの世界と自身の生とを対比し、内側の主観的な視点からのみこの物語を感じるのではなく、その物語を客観的に捉えなおすことが出来るのである。James Wood はクローンの命の無益さを読者に訴えることによって、読者は自身の人生の無意味性について考えさせられるのだ (Wood) と述べているが、読者は、ただクローンである彼らに共感し、感情移入するだけでなく、自身の人生についての再考をも余儀なくされているのだ。

#### 4. 複製品の価値

読者は、自身の人生を彼らクローンたちの人生を通して思い起こすうちに、必ず終わりがやってくるという事を意識させられる。そして、自身の人生と比べ、クローンの短い人生、閉ざされた可能性に同情し、その残酷さ故に、彼らをマダムが語ったように「かわいそうな子たち (poor creatures)」(267) と考えてしまうかもしれない。しかし、この『わたしを離さないで』という小説はただ悲惨な現実を突きつけて終わっているわけではない。彼らに与えられた「未来がないという未来」から、変えようのない現実と直面しながらも尊厳をもち前向きに生きていくためのヒントを読者に示しているのだ。

クローンであるキャシー達は、「介護人 (carer)」となった後、提供者として長くて四回の提供の後、早ければ二回目の提供の後にその人生を「完結 (complete)」する。ポッシブルから作られた複製であるクローンの悲哀が意識されがちだが、キャシーの記憶を共有しその経験を辿ってきた読者は、彼女が育んできた思い出、とりわけ親友である Tommy や Ruth との記憶が、彼女にとっていかに大切なものであったかを知っている。彼女が、介護人となった今でも大事に保管している宝箱はそんなキャシーの様子を表している。宝箱とは、ハールシャム時代、生徒1人ずつに与えられた名前入りの木箱であり、子どもたちはその中に、自分たちが「交換会 (Exchange)」や「販売会 (Sale)」で手に入れた大切な宝物を入れ、ベッドの下に保管し

ていた。しかし、ヘールシャムを離れ、新しい生活の場であるコテージに移ったのをきっかけに、ほとんどの生徒たちはそれを捨ててしまう。そんな中、キャシーは、宝物をいつまでも大事に保管し、介護人になってからもそれらを取り出してはヘールシャムでの思い出に浸るのだ。これらの宝物の中で、キャシーが特に大切に、この本のタイトル、『わたしを離さないで』の元にもなっている3本のカセットテープに関しては、特に注目しておきたい。まず、1本目のカセットは、キャシー自身が販売会で手に入れたものである。販売会とは月に一回ヘールシャムで開かれる出店のようなもので、生徒たちにとって外の世界の物に触れることのできた重要な場であった。(41) このカセットは、Judy Bridgewaterの『夜に聞く歌 (Songs After Dark)』というアルバムを収録したもので、「わたしを離さないで (Never Let Me Go)」はこのアルバムに収められた1曲である。キャシーがこの大事なカセットを失くした際、Miss Geraldineを巡る筆箱の一件で示されたキャシーの好意に対しお返しをする機会を窺っていたルースが、代わりにプレゼントしたものが2本目のカセットである。このルースがくれた2本目のカセットは、元のカセットの中身とは全く別物であり、大人になったキャシーが、「とくにどうこう言うような音楽ではなく、聞くこともあまりありません」(75)と語っていることから、ルースの選んだ見当違いなものであったということがわかる。しかし、キャシーはルースの心遣いを喜び、ヘールシャム時代の大切な宝物のひとつに加える。それは、ルースからもらったそのカセットが2人を再び結びつけることになった友情の証であるからだと考えられる。3本目のカセットはイギリス中の落し物が集まる街と、ヘールシャムの生徒たちに信じられていたノーフォークを訪れた際に、トミーがキャシーにプレゼントしたもので、中古屋さんで発見したジョディ・ブリッジウォーターのカセットである。このカセットは、ルースの時とは違い、中身は同じではあったが、キャシーが元々もっていたものであるかどうかははっきりしない。しかし、カセットが本物かどうかということはキャシーにとって決して重要な問題で

はなかった。それは、キャシーの為に見つけようとしてくれたトミーの気持ちや、それを見つけるために一緒に探した思い出こそが大切であったからである。そもそも、キャシーの大切にしていたカセットについても、レコードからの複製である大量生産された物のなかの1本であるように、ルースの似ても似つかぬコピーや、トミーの似てはいるが違うコピーなど、そのどれもがオリジナルとは違うものであった。しかしそのどれもがキャシーの大切な宝物になったということは、この物語における複製品の価値を示しているのではないだろうか。Matthew Beedham はイシグロの小説の中でコピー品が否定的に描かれている (Beedham 141) ということを挙げているが、コピー品のカセットであってもその重要度は変わらないというキャシーの態度からは、コピー品が必ずしも否定的に描かれているわけではないということが分かる。つまり、オリジナルであろうとコピーであろうと、それが人や物との関係によって付与される事になる意味それ自体にこそ価値があるということである。そこでは、オリジナルが優れていて、複製品が劣っているといった一義的な優劣関係は存在しない。同様のことは、ポッシブルと呼ばれる人間と、人間というオリジナルから作られたコピーであるクローンについても言えるのではないだろうか。

物語の最後にキャシーが見せる堂々とした姿は、そのことを示しているように思える。

The fantasy never got beyond that-I didn't let i-and though the tears rolled down my face, I wasn't sobbing or out of control. I just waited a bit, then turned back to the car, to drive off to wherever it was I was supposed to be.  
(282)

これは、トミーが使命を終えたあと、キャシーがノーフォークへ出向き最後にもう一度だけ、トミーの幻影を想像することで、感傷に浸ることを自分自身に許す場面である。しかしそれも一瞬の出来事であり、最後に「行くべき

ところへ向かって出発しました」と語るキャシーは、好きな人と一緒に暮らすことも認められず、職業も制限され、自分の命さえも限定されているような残酷な現実の中であっても、単に記憶にすがりつき、追憶にふけることなく、自分の生きている現実をまっすぐに見据えようとする。このように、残された短い未来を最後まで生きようとするコピーとしてのキャシーの態度は、オリジナルとされる人間に、あるべき生に対する姿勢を教えてくれる。この時、複製品であるキャシーの威厳を持った態度に、読者は強く訴えかけられるのである。生に対するあるべき姿勢の前に、オリジナルな人間や複製品のクローンといった通常語られる優劣関係は崩され、読者は、彼らを通して自分たちに必ず訪れる人生の終焉について否応なしに深く考えさせられることになるのである。

この作品のテーマを“Life is too short”だと語るイシグロは、とりわけ短命を強いられているクローンだからこそ自分にとって何が大切なのかを考えるのだとインタビューで答えている。<sup>2</sup> そして「人間であるとはどういう事か?」「魂とは何なのか?」「わたしたちは何のために作られ、そしてその役目を果たすべきか?」という問いに、クローンを通して示唆することができることに気付いたとも語っている。<sup>3</sup> 限られた未来しか与えられていないクローンであるからこそ普通の人間以上に生の輝きを放つことができ、生を「生きる」ことができる。そんな彼らの存在は、私たち読者に、あらがうことのできない死に対しての、在るべき姿を示しているように思う。

## 注

本稿は京都女子大学英文学会2012年度大会（2012年10月27日）において口頭発表した原稿を加筆・訂正したものである。

- 1 平井氏は *Never Let Me Go* におけるキャシーの語りについて『カズオ・イシグロ 境界のない世界』の中で以下のように述べている。「イシグロの従来作品におけるように、彼女の語りの真偽を問うべき根拠はどこにもない。その中に、いくばくかの自己愛をとまなう脚色や弁護が潜んでいるとしても、それは〈人の常〉のことであり、語りの

- 真偽を問うことは、『わたしを離さないで』では、重要な問題ではないと思われる。」(184)
- 2 『読売新聞』2011年2月22日の待田晋哉による「短い人生、大切なものとは」を参照。
- 3 この点については、<http://www.guardian.co.uk/books/2006/mar/25/featuresreviews.guardianreview36>を参照。

#### Works Cited

- Beedham, Matthew. "Questioning the Possible: *Never Let Me Go*." *The Novels of Kazuo Ishiguro*. Hampshire: Palgrave Macmillan, 2010.
- Currie, Mark. "Controlling Time: *Never Let Me Go*." Ed. Sean Matthews and Sebastian Groes. *Kazuo Ishiguro: Contemporary Critical Perspective*. London: Continuum International Publishing Group, 2009.
- Ishiguro, Kazuo. "Future Imperfect." *Guardian* (March 25, 2006), <http://www.guardian.co.uk/books/2006/mar/25/featuresreviews.guardianreview36>. November 12, 2012.
- . *Never Let Me Go*. London: Faber and Faber, 2005. (『わたしを離さないで』土屋政雄訳、早川書房 2008年。)
- . *The Remains of the Day*. London: Faber and Faber, 1989.
- Wong, Cynthia F. "Odd Failures of Guardianship in *When We Were Orphans* and *Never Let Me Go*." *Kazuo Ishiguro*. Devon: Northcote House Publishers Ltd, 2005.
- Wood, James. "The Human Difference." *The New Republic* (May 16, 2005), <http://www.tnr.com/print/article/the-human-difference>. November 12, 2012.
- 柴田元幸 「僕らは一九五四年に生まれた」、『Coyote』2008年4月号 No. 26 42-43ページ。
- 平井杏子 『カズオ・イシグロ 境界のない世界』2011年 水声社。
- 待田晋哉 「短い人生、大切なものとは」『読売新聞』2011年2月22日 朝刊21ページ。